

ボルちゃん

喜多川雅人

私はボルサリーノ。

ご先祖はイタリアの出ですが、親の養子先の日本で生まれ、表参道の帽子専門店に引き取られました。お店の二十坪ほどの四角いスペースに巡らされた三段の棚には、ヨーロッパ各地の名門出身の仲間が、品良く顔を並べています。

緊張感も和らぎ、セレブな仲間たちともじっくりいくようになった梅雨に入る頃、ぶらりとお店に立ち寄ったのが、その後一生お世話になるご主人様でした。年恰好は五十代の前半でしょうか。

少し気になったのは頭髪です。風がやや強い日だったので、風下からの吹き上げで煽られ、坂の半ばに位置するお店に入るときには、それほど濃いとはいえないおぐしが激しく乱れてしまったようです。それを気にして、お店に足を踏み入れる前に、ショーウインドーのガラスを覗みながら、丁寧に梳かしておられました。

お店のオーナーとは顔見知りらしく、打ち解けた会話が聞こえてきました。

「……らっしゃい、お久しぶりで。今日はどんなものをお探でしょうか？」

「いやあ、このところ急にオツムが寒々しくなってますね。外出用になにか一つと思って……。この間、成田空港でお客様を待っていたのだけど、到着ロビーに、税関から出てくるお客さんを上から映す鏡があつてね。見上げると、頭のとっぺんにテニスボールほどの穴を開けた薄毛の男が大写しになってね。『こうなるとヤバイよな』と呟きながら一足前に進んだら、穴も一緒に動くじゃない。自分だったのよね。で、これはヤバイと思ったわけ……」

「そういうことでしたか。お見受けするところ、おっしゃるほどではないようですが、ごゆっくりお選び下さい」

……というわけで、二度ほどぐるりと商品棚を廻ったあと、ご主人が最後に手に取ったのが私です。私は自分でいうのもなんですが、上品なダークグリーンの柔らかい、ボルサリーノでございます。お値段が手頃だったのでしよう。お代をピン札で払うと、そのまま被ってお店を出られました。

ご主人のお名前は、中村喜一郎。バタ臭い容姿と不釣り合いな、昔っぽい名前です。店を出た喜一郎さんが向かったのは、南青山の事務所です。会社に戻

ると新しい帽子を載せた喜一郎さんを秘書が迎え、声を上げました。

「あら社長、お似合いですよ、その帽子。かっこいい！」

可愛がっている美女だからたまりません。私を手放せなくなりました。どこへ行くのでもお供します。ご主人は、私に見合った上下を何着か詠える始末です。

中村家での私の居場所は、玄關脇に置かれたガラス扉で開閉するキャビネットです。四方が四〇センチ、高さは一八〇センチもある四角いガラス製。中は硝子板で五段に仕切られ、四つの帽子が、各段に一つずつ飾られています。使い勝手がよくないのか、一番下は空席です。私のほかには、FILAの白地のテニス帽、コットン素材のベージュのハンチング、同じく黒地の毛糸のスキー帽といったところです。その順序で陳列されています。

年月が経つのは早いもので、中村家に来てからあつという間に二十五年過ぎました。

ご主人は六十五歳で社長を退くと、完全に引退して、今年のゴールデンウィークに喜寿を迎えられました。いずれも年齢相応の疲れが隠せません。

退職されて年金生活に入り、月月火水木金金、毎日が日曜日のご主人ですが、奥様にしっかり管理されている風情です。所属する「好々爺川柳会」で、最近ご主人が詠んだ一句は、「風当たり 外より強い 家の中」。同好の男性仲間から得票が集中したとか。

帽子仲間ではこんな会話が飛び交います。

「最近喜一郎さんのテニスもすっかり動きが鈍くなってね。この間など相手のドロップ・ショットを拾おうとして走ったら、足がもつれて転んじやった、その途端に小生はお頭からコートに投げ飛ばされてね、痛い目に会っちゃった。ご主人様は薄毛が丸出しで、それを知らなかった女性たちがクスクスしてたね」
「スキーでも去年だったかな、急斜面で小まわりしていたら板が絡んで大転倒。俺様は冷たい風に、はるか下の方まで吹き飛ばされたってわけ。若い女性が拾ってくれたけど、寒々しいお頭が丸出しになったご主人の情けなそうな顔った

らなかった！」

ボルちゃんばかり可愛がるご主人へのやつかみからか、こんな会話が止まりません。

奥様との話といえば、仲間によれば、こんな話も出たとか。

「女は男より五、六年は長生きするのですからね。呆けなうちに、お葬式のことも決めておいてくださいよ。御棺の中に何を入れるとか、あなたが何を着るかとかね、好きなようにしてあげるから……」

「そうだね、たまにはいいこというね。お言葉に従つていうと、着るのはタキシード、靴はバリーだね」

「帽子はどうするのよ？」

「悩んでいるのだけだね、一番気に入っているのはボルサリーノのボルちゃん。だから、彼女を両手で抱くようにするのはどうだろう」

「ボルちゃんなんて、なんだか嫌らしい言い方だけど、分かったわよ。あら、また寝ているの。すぐそうなのだから……。お迎えが近いのかもね……」と、独り言が止まりません。

いろいろありましたが、最後まで面倒を見てくれて、懐に抱かれて天国まで一緒に過ごせるとか。その思いやりに感激のあまり私の眼から止めどなく溢れるものが……。

(完)